

特別インタビュー

日本ガラスびん協会会長 石塚 久継氏

(石塚硝子株式会社代表取締役社長)

ガラスびん広報を強化して 需要創造につなげる

日本ガラスびん協会は、ガラス製びんメーカー大手6社とガラスびんフォーラム(中小製びんメーカー組織)を会員とする任意団体だ。同協会はガラスびんの広報活動を主な事業方針に掲げ、ガラスびんの認知拡大と普及、市場拡大に貢献すべく事業活動を行っており、2013年度から石塚硝子株式会社社長の石塚久継氏が会長に就任している。

就任1年を経たの感想と2014年度の事業方針は？

日本ガラスびん協会でもこれまで運営委員や理事等で協会活動にかかわってきました。このたびの会長就任により、他のガラス産業界の会合にも出席するようになり、ガラス素材を様々な角度から見ることができました。

この1年は、協会のあり方を根本から見直し、改めて協会活動を検証してまいりました。その結果、主たる事業として行なっている広報事業は、各施策を有機的に機能させ、ガラスびんに対する理解や認知を地道に浸透させていくことにいたしました。2014年度もこの方針を堅持し、引き続きガラスびんの広報事業を行なってまいります。

2013年のガラスびん出荷量についてのご見解と2014年の予想は？

2013年1～12月の出荷実績は114万7,485トン(前年比99.2%)で、ほぼ前年並みとなりました。当協会の事業年度である4～3月ベースでは、前年比100.3～100.5%で着地すると予想しており、前年を超えれば19年ぶりの増加となります。

2013年の主な減少要因は、小びんドリンクの1.2万トン減が挙げられます。一方、増加要因としてウイスキーやワイン、RTD、RTSといった酒類製品が好調に推移しました。特にCVSで全般的にガラスびん製品の棚割りが増加しているように感じています。

2014年は消費増税が4月に行なわれるため、1～3月は駆け込み需要が見込める一方、4～6月は反動による需要減になるでしょう。それでも年間では前年並みを維持すべく、会員各社の努力に期待しております。

また富士山と並んで和食が世界遺産になりました。政府の方針でも日本酒の輸出振興がなされており、ガラスびん入り日本酒を含めて注目が高まっていくものと期待しております。

広報事業の活動方針は？

当協会としては、ガラスびんの需要拡大をめざして広報事業を行っております。これまではTVCMや新聞広告、ガラスびんアワードを行なってガラスびんの話題喚起と需要拡大をめざしてきました。

現在は、長期的視点からガラスびんを地道にアピールし続けることが需要を支えるとの考えに立脚し、3年目を

迎えた「びんむすめ」プロジェクト、10回目を迎えた「ガラスびんアワード」、消費者による「ガラスびん応援隊」、他業界団体との共同企画など、継続的な広報活動を行なっていく方針です。

「びんむすめ」プロジェクトでは、2013年は夏と冬の2回で「ラムネびんむすめ」「ドレッシングびんむすめ」「地ビールびんむすめ」「醤油びんむすめ」「シャンメリーびんむすめ」「牛乳びんむすめ」の6名を選出しました。夏は山手線主要駅、冬は大阪梅田駅での駅貼りポスター掲出など、びんむすめ専用ホームページやFacebookなどのSNSと融合させ、話題作りができたと考えております。

「ガラスびんアワード」は2013年で10回目を数え、今年度は3月19日にアワード各賞の受賞者が発表され、授賞式を開催しました。今回は155点にのぼる応募があり、飲料・酒類・食品・医薬品等の企業ではガラスびんアワードの入賞をめざしたデザイン開発がなされるようになってきました。このようにガラスびんアワードは、ガラスびんユーザーに定着したイベントとなっております。

このほか、一般消費者によるガラス

びんの普及啓蒙活動として行なっている「ガラスびん応援隊」が3年目を迎えました。ガラスびん応援隊は、主要なブロガーが中心となり自主的な活動として、ガラスびんの話題喚起を行なっています。最近ではガラスびんアワードの授賞式にも参加していただき、クチコミ効果による消費者とアワードとの接点拡大を図っております。当協会としては、これらの事業を有機的に結び付けることで相乗効果を得たいと考えています。

ガラスびん産業の将来像は？

ガラスびんの生産量は少しずつ縮小し続けている状態で、市場規模を維持することに精いっぱいです。しかし容器包装リサイクル法の改正論議の中でも、リユースやリデュースを加速させる動きが見られることはガラスびんにとって追い風になる可能性があります。

当協会は定期的に消費者の意識調査を行っており、今年は3回目となる調査を1,000人規模で行なう計画です。今回の調査では、他素材との比較ではなく、ガラスびんの良さやイメージに



着目し、会員各社が実際にお客様への提案に使えるような調査を行ないます。この調査結果は、今年7月頃までに公表する予定です。

当協会は、私が会長に就任しただけではなく、運営委員会や業務推進委員会、広報委員会といった各委員会のメンバーも若返っております。若い力を活用し、ガラスびんの需要拡大に向けて活動していきたいと思っております。ガラスびんはリユースで再利用でき、カレットとしてリサイクルできる自己完結型の容器です。ガラスびんの特性を理解したうえで「容器」としての存在価値を探し出していきたいと思っております。

【インタビュー・写真：埴 義彦】